東日本大震災復興祈願万灯会

思いを灯に託し被災地の復興祈る

鎌倉・浄光明寺

3月10日、神奈川県鎌倉市の扇ガ谷・浄光明寺（大三輪龍哉住職）で鎌倉十三仏詣実行委員会主催の「東日本大震災復興祈願万灯会」が開催された。これは鎌倉の仏教各宗派寺社（真言宗、浄土宗、臨済宗、日蓮宗）の僧侶が宗派を超えて法要を執り行い、一般の参列者とともに復興を祈願するもの。

浄光明寺客殿での合同読経

午後5時半に各宗派の僧侶が海蔵寺に集まり、法要を行った後に浄光明寺まで行道を行った。僧侶に続き、信仰の篤い参詣者たちが歩いた。浄光明寺の山門から境内に入った後、浄光明寺境内の用意された場所（臨済宗：仏殿、日蓮宗：観音堂、浄土宗：客殿、時宗：客殿、真言宗：不動堂）に各宗派に分かれて移り、読経が行われた。参詣者たちは、それぞれの宗派による読経の中、順番に一人ひとりの思いを綴った万灯ろうそくを献灯した後、焼香を行い、東日本大震災の犠牲者に祈りを捧げ、復興を祈願した。

すべての宗派の読経が終わった後、午後7時15分に僧侶が客殿に集まり、合同読経が行われた。代表焼香の後に、参詣者が順番に焼香した。読経が終わり、浄光明寺の大三輪住職が最後に挨拶の言葉を述べた。

「皆様からの浄財は毎年『未来・連福プロジェクト』に寄付している。同プロジェクトは、被災者の方々を鎌倉に招待し、建長寺に2泊しながら、様々な体験をしていただく活動をしている。私も参加者との交流会に出席しており、昨年の交流会では福島からの参加者に、『これまでは原発憎しだったが、このような素晴らしい会に参加できたのは原発のおかげだ。もう原発を恨むのはやめる』という心に残る言葉をいただいた。鎌倉での3日間の楽しい思い出が癒やしになっている。万灯会の活動が決して無駄ではなかったと、逆に励まされ、これからも被災地のことを思い続けようと決意させられた。

今ここにいる皆様は、それぞれの思いをたくさんの灯という形で仏様の前に示された。この光は人々を安心させる智恵の光として、熱は人々を優しく包み込む慈悲の温もりとして、被災された方々に大きな力を与えている。今ここで読経した観音経には『無垢清浄光（むくしょうじょうこう）慧日破諸闇（えにちはしょうあん）能伏災風火（のうぶくさいふうか）普明照世間（ふみょうしょうせけん）』という一節がある。けがれのない清らかな光は、智慧と言う名の太陽となってあらゆる闇を打ち破り、災いの風や火をよく鎮め、世界の隅々まで明るく照らすという意味だ。まさに今日の皆様の行いはこの経に書かれた観音様の功徳そのものと言える。そして皆様の心の中に観音様が宿っていることを証明している。皆様の心の中にある観音様をこれからも大切にしてもらいたい。きょうは浄光明寺の名の通り、この寺が清かな光で明るくなった。これからも被災地のことを思い続けてほしい」

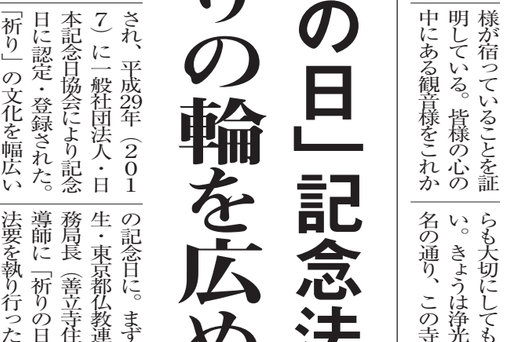
「祈りの日」記念法要

祈りの輪を広めよう

池上本門寺

東京都大田区の池上本門寺で3月27日、「PRAY for（ONE）」主催の「祈りの日」記念法要が執り行われた。「祈りの日」は全日本宗教用具協同組合（全宗協）によって制定され、平成29年（2017）に一般社団法人・日本記念日協会により記念日に認定・登録された。「祈り」の文化を幅広い世代に広めることが目的で、今回は登録後2度目の記念日に。まず新倉典生・東京都仏教連合会事務局長（善立寺住職）を導師に「祈りの日」記念法要を執り行った。

鐘の音が響き、参列者が合掌する中、導師が入堂。静寂の中、「南無妙法蓮華経」の題目が唱えられ、世界平和、万民安楽、身体健全、所願成就を祈願した。導師が退堂。記念法要は滞りなく厳修された。



PRAY for（ONE）代表理事の保志康徳氏は代表挨拶で、「祈りの日」は、祈りという形のないものだが、一年のうちの一日は、周りの人たちや困った人たちのために祈ろうという、身近な小さな種から生まれた。これが咲いている桜のように広がればいいと思う」と述べた。

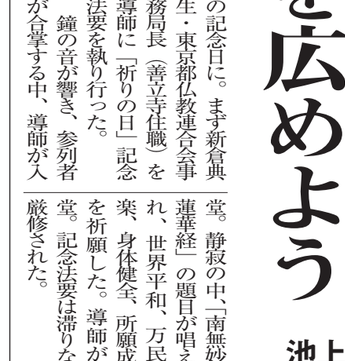
続いて、吉田光宏・全日本宗教用具協同組合副理事長は「この日の起源は古い。天武天皇は日本各地に祈りの場を設けよという詔を出した（その日が当時の暦で3月27日と言われる）。祈りの大切さは太古の昔から言われていたことだ」と、蟇田吉昭・博報堂クリエイティブプロデューサーは「甲子園球場のそばで生まれ育った私は、小学校3年生の時、終戦記念日に1分間の黙祷をし、その後、違った風景が見えるという経験をした。祈りによって今まで見たものと違ったものが見えてくる」と祝辞を述べた。

供養の日普及推進協会会長の大澤静可氏『母の日参り』パートナーシップ推進役の小仲正克氏の祝辞が続いた後、企業オーナーの100年人生を支える会事務局の松尾裕子氏は「日々の暮らしの中で、誰かのために祈る機会を失ってしまい、祈りをする余裕はないのではと思ってしまう。だが、PRAY for（ONE）のホームページに書き込まれているさまざまな祈りを見ると、世の中の人々の心の中には祈りというものが残っているということがわかり、温度かい気持ちになった。次の世代に残していくものは何なのかを考えていかないといけない」と祈りの大切さを訴えた。

次に座談会が始まり、射場一之・日本石材産業協会会長、石井時明・全日本葬祭業協同組合連合会会長、新倉典生・東京都仏教連合会事務局長、上野國光・PRAY for（ONE）理事、書家の金澤翔子氏、金澤泰子氏がそれぞれ「祈り」について語った。その後、ダウン症の天才書家、金澤翔子氏が母の金澤泰子氏と共に壇上に上がり、参列者が注目する中、「祈」という字を揮毫した。

最後に「祈り鶴」ワークショップが行われ、岩田弘美・PRAY for（ONE）理事主導のもと、参加者が一斉に祈りと願いを「祈り紙」（折り紙）の裏に書き、心を込めて「祈り鶴」（折り鶴）を折った。

「ふるさと」を参列者全員で歌った後、閉会した。


「祈」の揮毫を披露する金澤翔子氏＝3月27日、東京都大田区の池上本門寺

御歌が被災地に勇気

皇后さまの歌碑建立

宮城県東松島市

お披露目された皇后さまの歌碑

東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県東松島市野蒜（のびる）地区の復興祈念公園に、皇后さまが被災地について詠まれた御歌の碑「皇后陛下御歌碑」が建立され、3月10日に除幕式が行われた。地元の市民ら200人以上が集まり完成を祝った。

「野蒜とふ愛しき地名あるを知る　被災地なるを深く覚えむ」

歌碑に刻まれたこの歌は、皇后さまが平成29年中に詠まれた数ある歌の中からご自身で選ばれ、昨年1月に発表された3首のうちの一つ。皇后さまが春に、御所の庭で摘んでいた植物のノビルと被災地の野蒜への思いを重ね合わせて詠まれたものという。

歌が発表された後、野蒜地区の住民から感謝の声が上がり、そのお気持ちを後世に伝えようとの気運が高まった。地元自治会などを中心に歌碑建立実行委員会が組織され、市民や企業から賛助金を募り完成させた。歌碑は高さ180センチ、幅130センチで、蔵王石製。下部に地域名産の野蒜石が静かな波のようなデザインで配置されている。

挨拶に立った建立実行委員会の菅原節郎委員長は「震災で多くの人々が家族や友人を亡くし、心を刃物で抉られるような思いをした。その日から8年間、毎日その傷を一針一針縫うようにして過ごしてきた。そのような中、皇后さまがこの地を御心に留め覚えていてくださった事実は、被災者へ慰めと復興への大きな勇気となった。感謝の気持ちを後世に伝え、鎮魂の一助になればと願う」などと述べた。

除幕式には渥美巌東松島市長をはじめ、震災の3日後に生まれたという小学2年の女の子も参加し、その成長した姿に8年の月日を改めて想起する場面でもあった。

ハンカチを握りしめ涙ながらに見守るお年寄りも見られた。70代の女性は「平成の時代がもうすぐ終わるこの時に、皇后さまの思いを残せることに意味がある」と語り、また50代の男性は「今後、この地を訪れる観光客に野蒜の名をよく知ってもらえるのでは」などと語った。

歌碑の建立場所は震災遺構「旧野蒜駅」が隣接しており、式後にそのプラットフォームを舞台にした市民ミュージカル「とびだす100通りのありがとう」が披露された。

東京のNPO法人の支援で実現したもので、市民およそ200人が参加。劇中では「津波で皆流され、箸1本もみつかりませんでした」「台湾仏教会から7万円いただきました！　どこよりも早い現金支給で助かりました！」といった具体的な台詞がちりばめられ、歌声や踊りで震災の経験や復興を支援してくれた人々への感謝を元気いっぱいに表現し、会場を盛り上げた。

震災遺構「旧野蒜駅」で上演されたミュージカル

「ホロニック・フォーラム」開催

一円相和の理想を提唱

東京都渋谷区

3月24日、東京都渋谷区の勤労福祉会館で生命ネットワークフォーラム（米田晃代表理事）が主催する第1回「ホロニック・フォーラム」が開催され、約80名の参加者が会場を埋めた。

まず、二宮総本家15代当主（二宮金次郎から7代目）で近世思想研究家の二宮康裕氏が「二宮金次郎の一円思想」と題し講話を行った。講話の要旨は次の通り。

二宮金次郎は貧民の救済、農村の復興、財政の再建に寄与したが、彼の思想はほとんど知られていない。彼の思想は大半が「円」で語られている。彼の「天道」は自然、「人道」は人の営みのことで、自然と人間が協力することを強調した。これを「一円相和」という。

金次郎は相模国栢山村（現在の神奈川県小田原市栢山）の貧乏な家で生まれた。酒匂川の2回の洪水体験が金次郎の思想形成に影響した。その後、苦労して土地を元通りにしたが、その苦労のせいか、父は14歳の時、母は16歳の時に亡くなり、そのため「孝」の認識が一層強まった。母が亡くなった年に田植えをした田が、再度洪水の被害に遭った時に感じたのが天道（自然）の脅威だ。だが、分流が埋まった所に捨て苗を植えたら、一俵の米が実った。そこで金次郎が体験したのが、災いももたらすが恵みももたらす「天道の二面性」だ。

金次郎は小田原城下に出て、家老の服部家に仕えるようになり、商才が認められ、服部家の財政再建を依頼された。この時に考え出したのが「分度論」で、去年までの経費の3分の2で暮らし、残り3分の1を借財の返済に回すというものだ。そして分度論を使って、3分の1を貯蓄し、それを運用に回すようになる。その後、活躍が認められ、小田原城主に藩の老中に抜擢される。

だが、やっかみゆえに人々の批判を受けるようになったが、城主が金次郎を一生側近として庇護したので脱することができた。「一円に実り正しき月夜かな」と日記に記されている。この世の中が仁で覆われていたならば、この満月のように作物は実り人々は平安に暮らせるだろうという意味だ。

次の試練は、関東・東北一帯が大打撃を受け、30万人が死亡した天保の飢饉で、金次郎はそれも乗り越える。準備万全で、余剰米を救済に充てたからだ。

この活躍で、水野忠邦から幕臣に抜擢された金次郎が話したのが「百粒の米」の論理。100粒の米があるとして、それを全部使ったら1回の救済にしかならないが、99粒を施して、残り1粒を水田に蒔くと秋にはまた100粒の米になる。これを繰り返すことによって永久に民を救済することができる。これは金次郎の一円思想を象徴するもので、金次郎は飢饉救済のため民の暮らしを優先し、5年間は税金を取らない政策をした。

指導者には「徳治主義」を説いた。朝廷は尊重されなければならず、統治する武士は農民を守るために存在し、お互いが調和しないといけないと。士農工商についても、農民の耕運によって食が得られ、工匠の勤労によって建物が建ち、商人が産物を商うことによって皆が幸せになると説明している。すべての人が協力し合ってこの世が成り立つという思想が彼の「一円相和」である。

続いて、生命ネットワークフォーラム代表理事の米田氏が「ホロニックな生き方」と題し講話を行い、二元対立の世界観を超え、意識科学に基づいた世界観、ホロニック的人生観を広めるため、ホロニックマガジン「INOCHI」を発刊すると発表した。

講話をする米田晃氏＝3月24日、東京都渋谷区の勤労福祉会館

講話をする二宮康裕氏＝3月24日、東京都渋谷区の勤労福祉会館

岡山宗教散歩〔5〕

法然⑤

郷土史研究家　山田良三

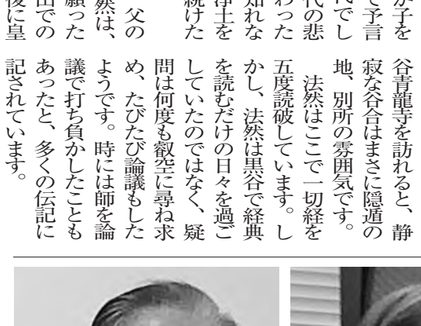
母への思いが女人往生の教えに

誕生寺の北、2キロ余りの津山に向かう旧街道の脇に「都原（みやこばら）」の石碑と「仰叡の灯（ぎょうえいのひ）」と呼ばれる灯籠が建っています。岡山県美咲町の当地は、法然の母秦氏君（はたうじのきみ）清刀自が、勢至丸（法然の幼名）の都への旅立ちを見送ったことから「都原」と名付けられ、毎日、この地に灯を灯し比叡山にいる我が子の無事を祈ったことから、そう呼ばれています。

法然上人誕生850年を記念して建てられた顕彰碑には、母が詠んだ「かたみとてはかなきおやのとどめして　この別れさえまたいかにせん」との歌が刻まれています。夫が殺され、その忘れ形見の息子とも別れなければならない母の哀しみが偲ばれます。ここから都までは出雲街道を経て50里（200キロ）、比叡山までは55里余です。

誕生寺の寺伝によれば、秦氏君は久安3年（1147）11月12日に病没となっています。母は叡山の法然にたびたび手紙を書いており、誕生寺には死の前日に書かれたという手紙の写しが伝えられています。

長岡京市の粟生光明寺の御影堂には、本尊となっている「張り子の御影」があります。この御影は、流罪になった法然が、その途上弟子の湛空に出会い、肌身離さず持っていた母の手紙を取り出して、ともに作った御影だと伝えられています。もとは湛空が住職を務めた二尊院にあったものがいつのころからか光明寺に移され、今は光明寺御影堂の本尊となっています。


都原の石碑と仰叡の灯（岡山県美咲町）

誕生寺の寺伝によれば、法然の母の死は法然が15歳の時ですが、『醒酬本』には、このころ法然の父が殺されたと書かれています。梅原猛氏は、母の死と父の死は同じ頃だったろうと推論しています。『知恩伝』などには、法然の師観覚が法然の母と上洛して法然に会う記述があり、久安3年の病没ではないことになります。梅原猛氏は「観覚が上洛したのは確かだが、法然の母はすでに亡くなっていた」との見解を示しています。

いずれにせよ、切ない母の手紙の記録や「仰叡の灯」の逸話を合わせてみれば、遠い叡山にひとり息子を送った母の気持ちが痛いほどわかります。

私も15歳の時に父が亡くなり、母の手で大学に行かせてもらいました。最近、そのころの母の手紙が出てきたので読み返すと、当時の母の気持ちが伝わり、涙があふれました。子を思う母の心はいつの時代でも変わらないものです。

法然の教えで特に重要なことの一つは「女人往生」です。これには法然の母への思いが深くかかわっています。女人の救いについて説かれた仏典はほとんどありません

が、唯一、浄土三部経の中の無量寿経に女人往生の記述があります。「法然の母への思慕とその結果としての『女人往生』の思想が法然の専修念仏の教えに決定的な影響を与えている」と梅原猛氏は『法然　十五歳の闇』（角川文庫ソフィア）で述べています。

法然が誕生した時代は、藤原摂関家の権威がとされます。比叡山での法然の師は源光、後に皇円、叡空に師事したと多くの法然伝ではされていますが、梅原猛氏は「醍醐本から見て法然の師は叡空一人だったのでは」と書いています。

隠遁を願った法然に叡空は「隠遁するとしても無知はよくない」として天台三大部を学ぶことを勧めました。（醍醐本別伝記）による）以来、法然は黒谷の経蔵に籠り徹底的に読書に励んだのです。比叡山西塔北谷の黒谷青龍寺を訪れると、静寂な谷はまさに隠遁の地、別所の雰囲気です。

法然はここで一切経を五度読破しています。しかし、法然は黒谷で経典を読むだけの日々を過ごしていたのではなく、疑問は何度も叡空に尋ね求め、たびたび論議もしたようです。時には師を論議で打ち負かしたこともあったと、多くの伝記に記されています。